

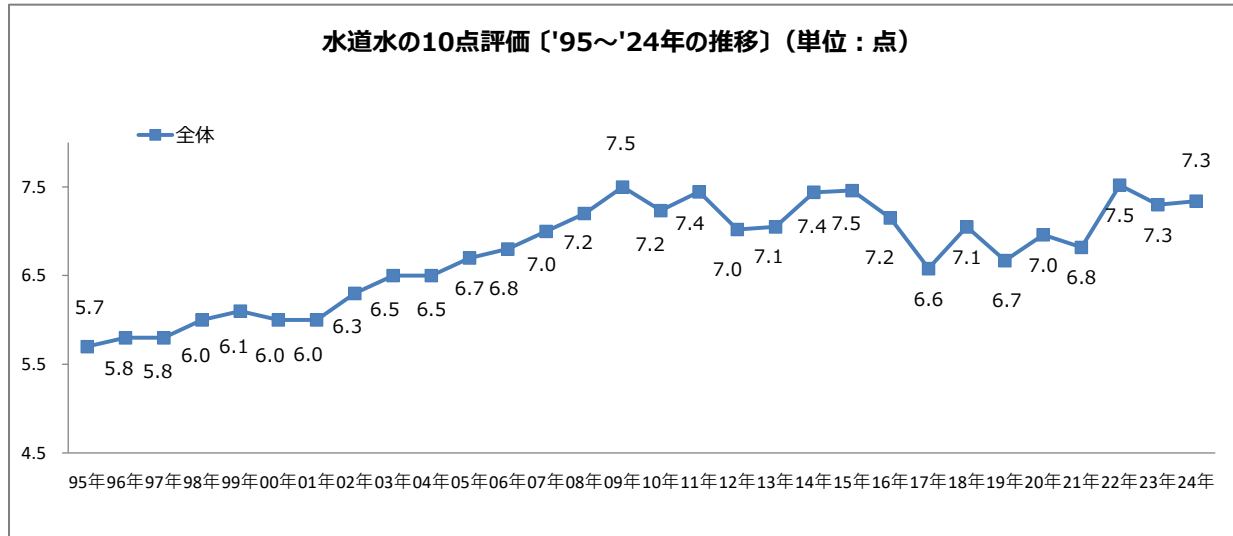
【特別企画】30年の水意識を振り返る

ミツカン水の文化センターでは、「水にかかわる生活意識調査」が今年で30回目を迎えたのを契機に、本調査の30年を振り返る特別企画を実施。生活者における水への意識が30年でどのように変化したのかをみる趣旨で、「水道水の評価」や「一番おいしいと思う水」をはじめとした主要な設問をピックアップし、第1回の1995年、今から20年前の2004年、10年前の2014年と、現在との比較を行いました。

Q.水道水を10点満点で評価すると？（0～10の整数を自由回答）

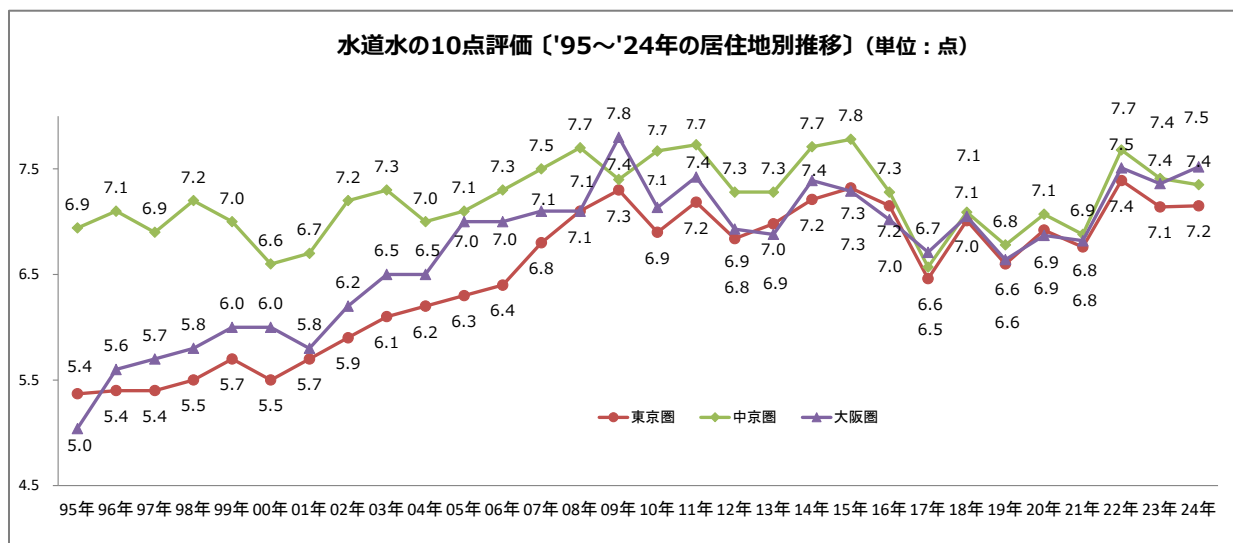
◇平均点は30年で上昇。近年は高い水準で推移

全体の平均点は、第1回調査の1995年が5.7点、30回目となる今年が7.3点と、30年で1.6点上昇しました。経年変化をみると、2009年までは概ね右肩上がりとなっており、同年をピークに、2010年からは横ばいを基調としながら増減を繰り返し、近年はピーク時に近い高水準で推移しています。



◇居住地別の差異が縮小傾向

居住地別の平均点は、1995年が東京圏・5.4点、中京圏・6.9点、大阪圏・5.0点で、2024年が東京圏・7.2点、中京圏7.4点、大阪圏・7.5点といずれも上昇。得点の推移を10年単位で見ると、1995年から2004年までの10年間はエリア差が大きく、次の10年（2005年～2014年）でその差が徐々に縮小。そして、直近の10年、とりわけ2016年以降はエリア差がほとんどなくなり、グラフの曲線がシンクロしているように見えます。居住地別における近年の傾向が、情報環境の平準化によるものなのか、地域性の喪失によるものなのか、調査結果のみで判断することはできないものの、当センターとしては今後の動向に注目してまいります。



Q.水道水について不満を感じていることは？（8択+その他+特に不満はない）

◇不満の内容は、「質」から「料金」へ

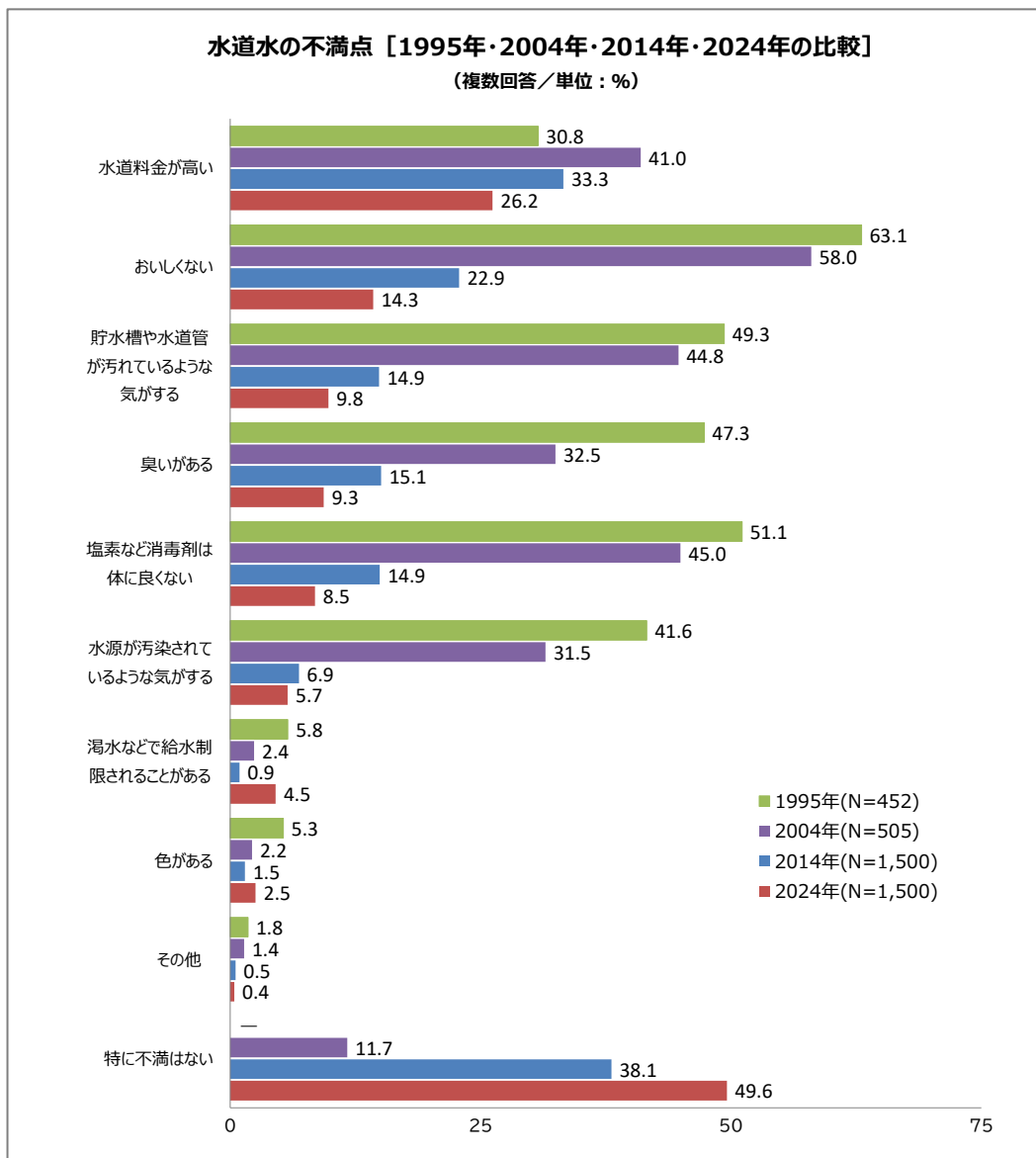
水道水に対する不満について、1995年（第1回）、2004年（20年前）、2014年（10年前）、2024年（現在）で比較すると、1995年と2004年は「おいしくない」「塩素など消毒剤は体に良くない」「貯水槽や水道管が汚れているような気がする」といった味や質に関する項目が上位を占めていましたが、2014年にはこれらの不満が激減し、2024年はさらに減少。それらに代わってトップに立ったのが「水道料金が高い」です。「水道料金が高い」は、1995年以降、常に不満の上位ではありましたが、味や質に関する項目の数値が大きく減少したことにより、近年は不満トップの地位を固めています。

ちなみに、2023年に実施したライフライン（水道・電気・ガス・通信）の料金に関する調査では、最も料金が妥当で、値上げに対する許容度が高いのは「水道」でした（第29回調査レポート参照 <https://www.mizu.gr.jp/img/chousa/2023/kekka2023-13.pdf>）。「水道に対する不満をあげるとすれば料金だが、他との相対的な評価による料金の不満度は低い」ということのようにです。

◇そもそも“不満がない”という人が大幅に増加

本設問における選択肢の一つである「特に不満はない」（1995年は項目なし）に着目してみると、2004年は僅か1割程度（11.7%）でしたが、2014年には約4割（38.1%）に増加し、今年は49.6%と半数に迫る勢いで数値を伸ばしています。

水道料金への不満は常に一定の水準であることを踏まえると、「特に不満はない」の増加には、「おいしくない」や「臭いがある」など味や質への不満の解消が関与しているものと考えられます。



【水道水の評価】

平成が始まってバブルが弾け銀行が破綻したり、1ドル＝80円という円高になったりした1995年は1月の阪神淡路大震災や3月のオウム真理教による地下鉄サリン事件があった一方で、ロサンゼルス・ドジャースに所属した野茂英雄投手が日本人として初めてナショナルリーグの新人王に選ばれた年である。

今年で30回を迎える「水にかかわる生活意識調査」の第1回はそんな年に行われた。

日本全国の下水道普及率がまだ54%(2022年には92.9%)だった当時、全国の河川の環境基準達成率もまだ72%(2021年で93%)で水道の原水となる河川水はまだまだ汚れていた上に、都会に集まる人々に安全な水を安定して供給するのが精いっぱい、味にまで気を配る余裕はなかった。そのため、特に東京や大阪といった大都会では水道水と言えはまずい、という認識が普通であった。

しかし、東京では1992年からオゾン処理に生物活性炭処理を組み合わせた高度浄水処理を開始して2013年に全量への導入が完了し、大阪でも1993年に同様のシステムを導入し始め2000年には市内全域に高度浄水処理水を配水するようになった。

30年にわたる調査の前半はちょうどこの時期に相当し、10点満点で5点ほどだった東京や大阪の水道水への評価は2009年にかけて上昇し、7点を超えるようになってその後は多少の増減を繰り返しながら評価は横ばいとなっている。

中京圏が1995年当初から高い評価を得ているのは主な水源である木曽川の水質が良いのに加えて今でも一部では緩速ろ過も用いられているからだというが、いずれにせよ素晴らしい。ただ、少し気になるのは特に2016年以降、評価の年々の変動のし方が東京圏や大阪圏と同期している点である。郵送アンケートからウェブアンケートに変えたのは2010年だそうなので、それが原因とも考えにくい。謎である。

【水道水の不満点】

水道への不満があるとしたら近年は「水道料金が高い」が筆頭だが、以前はそうでもなかった。

その昔、ペットボトルを含む瓶詰水の消費量が年間1人あたり4.5リットルであった1995年(2023年には40.2リットル)、最大の不満は味、63.1%の回答者が「おいしくない」を不満としていた。評価が上がった今では味に不満を持つ人は14.3%にすぎず、同様に、臭いへの不満は47.3%から9.3%に、色は5.3%から2.5%に減少している。ちなみに、水道水が一番おいしいと答えた人はこの30年間で3.2%から14.1%に大幅増だが、市販のペットボトル入りの水も18.3%から29.5%へとポイント的にはもっと増えている(6ページ参照)。ウォーターサーバーやタンクの水など、30年前には一般的ではなかった水を一番おいしいと考える人が増えた分、井戸水や湧き水が一番おいしいと考える人が減って、私たちの(記憶の中の)飲み水の水源が大きく変化したことがうかがえる。

水源汚染への不安も41.6%から5.7%へと減少しているが、これには、味の向上に加えて、普段眺めたり触れ合ったりする水環境が改善したおかげもあるだろう。貯水槽や水道管の汚れへの不安も49.3%だったのが9.8%へと減少しているが、これは2001年の水道法改正時に10m³以下の小規模の貯水槽についても各自治体の条例で大型の貯水槽と同様の管理が求められるようになり、それまでに比べると定期的な清掃と点検、水質検査などが行われるようになったためだろう。

塩素など消毒への不満も51.1%だったのが8.5%に激減している。これには消毒の重要性に対する理解の広がりもあるかもしれないが、むしろ、以前は安全を優先し、残留塩素濃度0.1mg/L以上1.0mg/L以下という国の水道水質基準の上限である1.0mg/Lに近い濃度で配水していたところ、塩素消毒の副生産物で発がん性が指摘されるトリハロメタンの生成を減らすためあって塩素投入量を減らす努力がなされたおかげだろう。管路の適正化により配水中に反応して塩素が減少するのを抑えたり、浄水場で1.0mg/L近くの濃度に上げて送るのではなく、途中の給水所で必要量を追加で注入するシステムを導入したりして0.4mg/Lを蛇口での目標の最大値と設定する自治体が増えたのである。30年前に比べて確実に塩素臭が減った成果が不満の激減に反映されている。

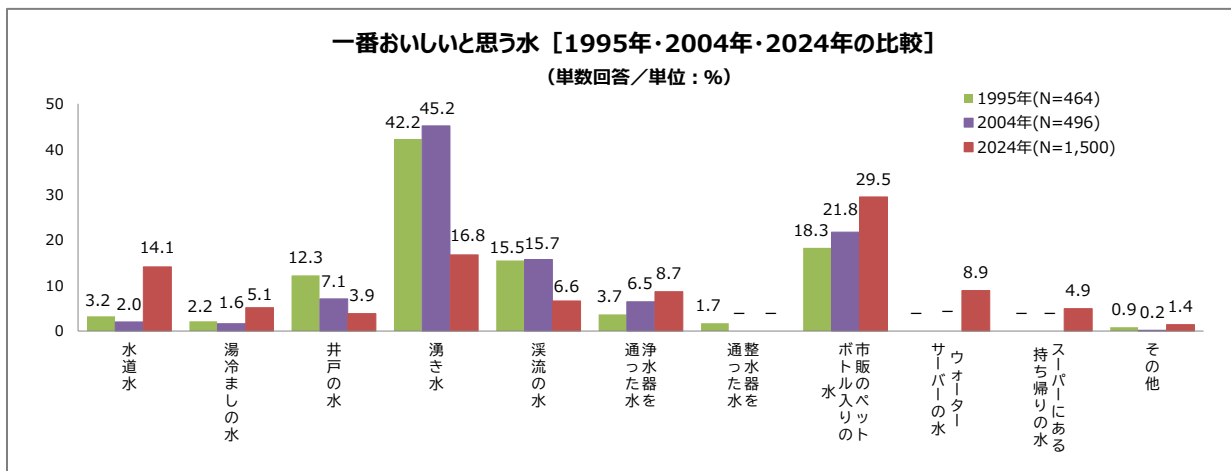
このように様々な不満点が激減した中で、料金に対する不満は30.8%から26.2%へと多少は減ったものの、他に比べると際立って高くなっている。もっとも、昨年度調査では電気、ガス、通信に比べて料金への納得感は高く、料金値上げに対する許容度も高かった。今後、減り始めた人口で同じサービスレベルを維持するには多少のコスト高を受け入れざるを得ないと想定される。これからの30年でどのように回答が推移するか目が離せない。

Q.一番おいしいと思う水は？ [9択（'04年:7択、'95年:8択）+その他]

◇「湧き水」が激減し、“市販の水”や「水道水」が増加

より現実的な安全性を重視する傾向か？

一番おいしいと思う水について、1995年、2004年、2024年のそれぞれのトップ3を比較したところ、1995年と2004年は1位「湧き水」（'95年・42.2%、'04年・45.2%）、2位「市販のペットボトル入りの水」（'95年・18.3%、'04年・21.8%）、3位「溪流の水」（'95年・15.5%、'04年・15.7%）と同様の順位で、2024年は1位「市販のペットボトル入りの水」（29.5%）、2位「湧き水」（16.8%）、3位「水道水」（14.1%）でした。2004年までは不動のトップだった「湧き水」や、「溪流の水」といった“自然の水”の数値が20年の時を経て激減。今年は「市販のペットボトル入りの水」がトップとなり、「ウォーターサーバーの水」（8.9%）と合わせると、約4割（38.4%）の人が“市販の水”を支持しました。また、2004年は僅か2.0%だった「水道水」が、今年は14.1%と大幅に増加していることも注目すべきポイントといえます。これらの結果を踏まえると、近年は、純粋なおいしさやイメージよりも、現実的な安全性を求める傾向にあるのかもしれない。



Q.日常生活で実践している節水や水の再利用方法は？

[14択（'14年:12択、'04年:11択）+その他+実践していることはない/'95年:5択]

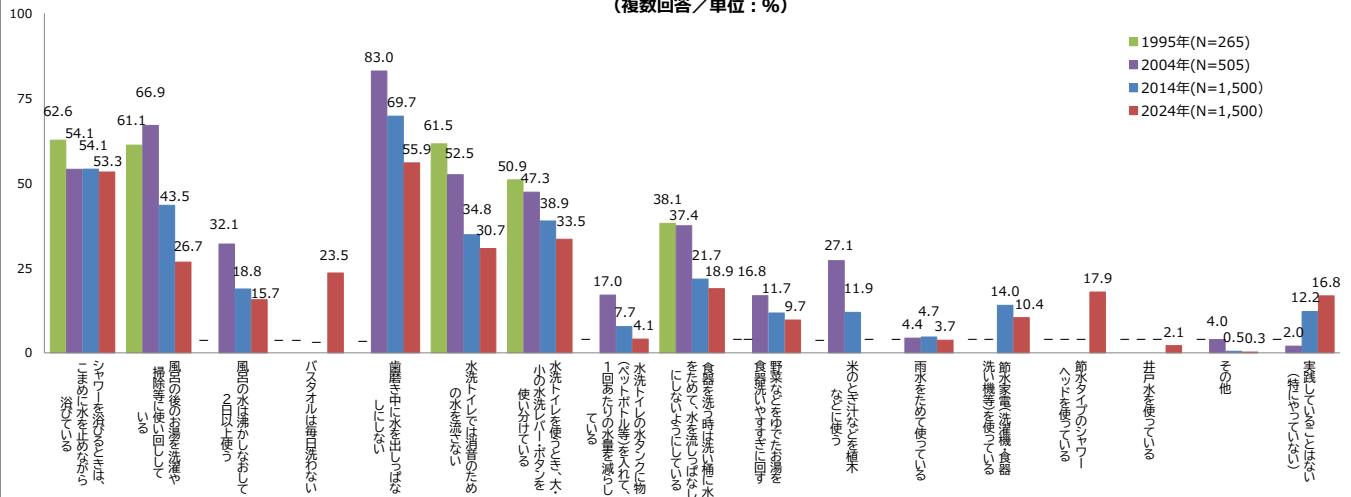
◇節水の取り組み方法は変わっていないが、取り組み率は低下

生活者における節水や水の再利用の取り組みは、30年でどのように変化したのでしょうか。日常生活で実践している方法について、1995年、2004年、2014年、2024年の比較を行ったところ、1995年の1位は「シャワーを浴びるときは、こまめに水を止めながら浴びている」（62.6%）、以降は、「歯磨き中に水を出しっぱなしにしない」（'04年・83.0%、'14年・69.7%、'24年・55.9% ※2001年に項目追加）が毎回トップとなっています。

本設問は、日常的に取り組まれている節水方法の移り変わりを把握する趣旨で、時代に合わせて選択肢を追加（または削除）しながら調査を続けているものの、上位を占める項目（「歯磨き中に水を出しっぱなしにしない」「シャワーを浴びるときは、こまめに水を止めながら浴びる」「水洗トイレを使うとき、大小の水洗レバー・ボタンを使い分ける」「水洗トイレでは消音のための水を流さない」「お風呂の後のお湯を洗濯や掃除等に使い回している」など）は毎回同様の顔ぶれとなっており、取り組み方法の経年変化はほとんど見られませんでした。しかし、各項目の数値に目を向けると、例えば「お風呂の後のお湯を洗濯や掃除等に使い回している」や「水洗トイレでは消音のための水を流さない」は1995年から30ポイント以上減少、「歯磨き中に水を出しっぱなしにしない」は2004年から27.1ポイント減少と、大きな変化が見られました。「水洗トイレでは消音のための水を流さない」の減少は、トイレの音消し用擬音装置の普及が影響した可能性も考えられますが、全体的に取り組む率が低下していることは言えそうです。

日常生活で実践している節水や水の再利用方法 [1995年・2004年・2014年・2024年の比較]

(複数回答／単位：％)



沖大幹先生による解説 ～Oki's View～ ③

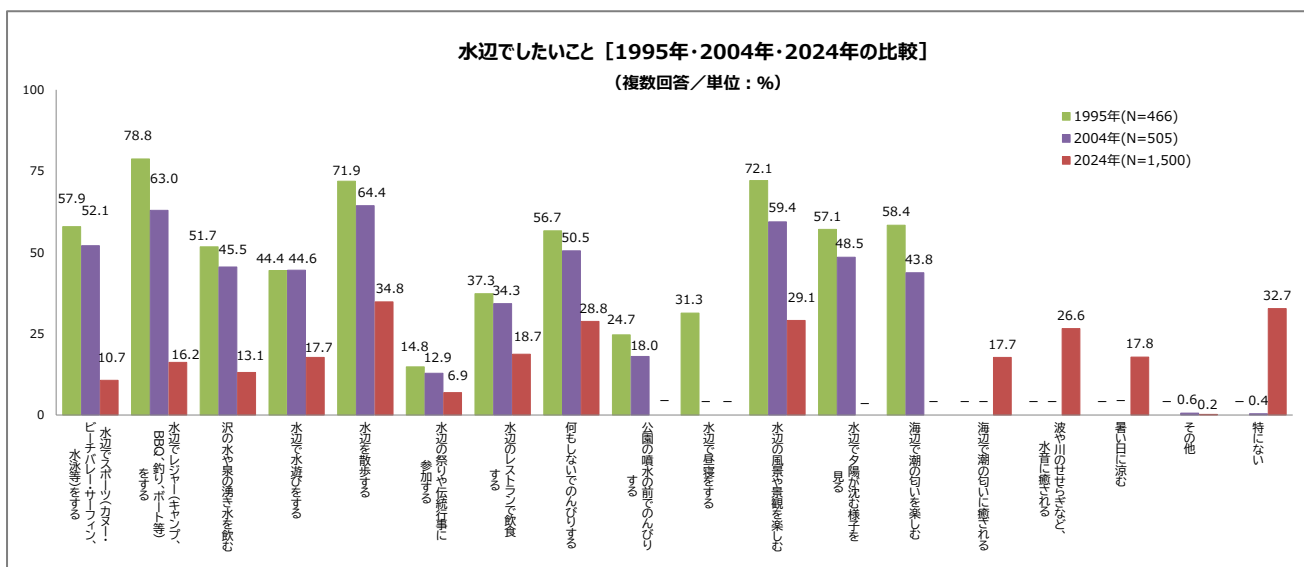
【日常生活で実践していること】

節水や再利用にかかわる日常の行動は軒並み減少している。回答からうかがえるのは、半数近くの人がシャワーを浴びる際にこまめに水(お湯?)を止めたりしていないし、歯磨き中は水を出しっぱなしにしている。2/3の人は水洗トイレを流すときに大小のレバーやボタンを使い分けていないし、3/4の人たちは風呂の後のお湯を洗濯や掃除などに使いまわしたりしていない。お風呂のお湯を洗濯に使うのは不潔だという考えもあるだろうが、洗濯物を入れた洗濯槽の水は風呂の水よりも普通は高濃度に汚いのではないだろうか。2004年でも沸かしながわして風呂の水を2日以上使う方が32.1%いたところ、今年は半減の15.7%である。

もし水道水が高くて節約しようと思ったらもう少し水道水を大事に使うと思うのだが、実はそこまでするほどには水道料金は高くないと感じている人が多いという事実の反映なのだろうか。

◇癒しを求める傾向がより顕著に？

上位項目の推移をみると、「水辺でレジャー」「水辺でスポーツ（カヌー、ビーチバレー、サーフィン、水泳等）」といったアクティブ系の項目は、この20年で数値を大きく下げ、今年はいずれも1割台となっています。では、「水辺の風景や景観を楽しむ」「水辺を散歩する」「何もしないでのんびりする」といったいわゆる癒し系の項目はというと、こちら数値自体はかなり減少していますが、減少率の差により、現状では【アクティブ系】＜【癒し系】となっています。



◇「汚くなっている」と思う人が大幅に減少

あなたの家の近くの水辺はどのように変化していると思いますか？との問いに対し、「きれいになっている」と回答した人は、1995年・11.6%、2004年・9.1%、2024年・12.9%とほぼ横ばいで、大きな変化は見られませんでした。一方、「汚くなっている」の回答者は、1995年から2004年にかけては51.1%→63.2%と増加していましたが、今年は20.7%と激減。3人に2人が「変わらない」と回答しました。

